

# 宗教とヨーロッパの形成

ジャン・ポール・ヴェイレーム

「人類愛は合理性に由来するのではなく、ヒューマニズムに生気を与えてきた準宗教的な神秘信仰に由来している。ヨーロッパの普遍主義は、単に合理性、客観性、科学性にあるのではない。それはまた、信仰と情熱にもよっており、ある意味では、キリスト教の相続者なのである。」(モラン『ヨーロッパ考』p.131.)

「現世的救済の宗教とともに、世界の偽りと悪もまた滅びる。……確かに、幻想をなくした多くの人々は、それゆえに、文学、哲学、古い宗教に引きこもっている。し

かし、ある人々は、それゆえに、彼らがモスクワや北京にあると信じてきた、あの具体的なものと普遍的なものとの調和を成し遂げる可能性を、ヨーロッパのうちに認めている。」(前掲書 p.189.)

ここ数年の間、CSP「プロテスタンティズム社会学センター」が企画した様々な研究および討論会は、以下のような項目に区分することができる。

——専らその統合の諸様式が研究されてきた少数派宗教集団の社会学(および心理社会学、さらに民族学)。(伝道



の社会学、地方的プロテスタントイズムについての研究、あるいは幾つかの福音主義的集団の分析に関する我々の討論会を参照(三)。

——組織の社会学——宗教的労働の社会的分割の分析、内因的な、同じく外因的な幾つかのタイプの権限との関連で定義される多様な宗教的エイジェント間の諸関係の研究(「新しい聖職者」についての討論会を参照)、権力の切り札の分配の分析(プロテスタント諸教会の牧師および在俗の幹部についての諸研究)

——制度間諸関係の社会学(フランス社会における宗教諸集団の位置についての以前の討論会、諸々のキリスト教運動についての最近の討論会……)

この最後の共同研究とともに、そして同じくC I M A D E「一九三九年に設立された難民相互援助のための私的委員会。現在は特に発展途上国からの人々を援助している」訳者」についての研究(連帯の社会学への寄与)を通じて、C S Pは、かつてに比べて、より明瞭に、社会運動の社会学に属すると見なしてよい諸研究に踏み込ん

る宗教的諸要因の重要性は、これまではおそらく過小評価されてきた。ヨーロッパを主題あるいは設計図とする様々な言説と実践(賛成および反対)の登場によりますます特徴づけられる状況のなかで、我々には、諸々の宗教的な集団、制度、そして伝統が、地方的なものと普遍的なものから成る弁証法を通じて、それらが所属する社会の民族的な型どりの再規定に寄与するそのありようを問う、なんらかの理論的機會があるように思われた。

しかしながら、本稿に見られる関心は、我々に、ひとつの巨大な複合性によってしか存在し得ないアプローチの困難さを言わずにおくことを余儀なくさせるものではない。というのは、ここで研究される諸々の現実(一方で宗教的な伝統とユートピア、他方で民族的伝統と超民族的な、いはば民族横断的企図)が極めて相互依存的であるため、我々は宗教、諸民族、「内容」としての、および「形式」としてのヨーロッパを交互に取り上げながら、ある時はより静的な、そしてある時はより動的な諸分析を連結すること、その題材においてはほとんど避け得ないからである。それ故、検討に付される多様なアプローチの呈

できている。このようなパースペクティブにしたがって、我々はしばしば、現今の幾つかの問題(とりわけ再生産、アイデンティティおよびコンセンサスの論理。伝統および制定されたものに付与される重要性。策略的ないしは戦術的な計算に並外れた能力をもつ「行動家たち」への非難。「諸教会」、国家、さらには「宗教」などの表現の採用の背後に隠された、制度的諸領域の実体化への傾向)の重要性と限界とをよりよく示そうとしてきた。

確かに、近來の一つのパースペクティブが、旧來のすべてのパースペクティブを追放すべきだと考えるのは軽率であろう。社会運動の社会学について語ることは、我々にとつては、なかならず資料発見的な機能をもっている。そこから、ある行動家たちが自らの伝統を構成する、よく確立された諸価値に従うとはいえず、制度的景観を正当化もしくは非正当化するための競争において、彼らはその制度的景観と諸表象(イデオロギーとユートピア)との変容に寄与するという仮説を、アプリアリに排除しないことが重要となる。

宗教社会学に関していえば、諸制度総体の構築に関する示の範囲が誤解される恐れのあることは理解できる。すなわち、自らの対象認識を彫琢するための諸観点を付け加えるだけで十分であると考えるほど我々はナイーヴではない。諸主題の、あるいはより正確に言うところ、諸々の作業仮説の、連続的な呈示が不可欠なのである。しかし、このことは、我々の希望が、討論会を通じてこれらの多様な仮説を、共同して、あるいはそれ以上に、弁証法的に検証することにあるのを隠すものであってはならないであろう。

アプリアリに、しかもあらゆる有用な貢献を成す可能性を予断することなく、我々の研究を次の四つの次元にしたがって構成してみよう。

#### 一、民族のおよびヨーロッパ的イデオロギー

##### ——空間と時間の政治的および宗教的表象

容認されるとすれば、数多くの伝統(特に宗教的なものであれ、世俗化されたメシア信仰に属するものであれ)が、最近まで、ときには過度の順応主義を、またあるときには逆の最小限のイデオロギー的順応主義を示してきたに

ちがいないと仮定して（異国の敵の共犯者だとの、繰り返される非難を前にしたフランスのプロテスタンティズムの場合を考へるかぎり）、我々は、幾つかのタブーと民族的なイデオロギー的禁止の撤回に等しい状況のなかで、これらの伝統のどのような象徴的潜在性が再発見（イデオロギー的撤回の撤回などによる再読、再解釈の諸現象）される余地があるかを問うことができる。

逆に、我々は、その状況が手直し「aggiornamento」の試みや社会的再正当化の企図にとつて好都合であるかどうかを自問することができる。すなわち、宗教的および政治的行動家たちの言説と実践のうちに、ヨーロッパの準拠の、ないしはヨーロッパの形成へと至る過程（一つの不可避の過程）について抱かれる観念の、過大評価と相関的な新たなイデオロギー的順応主義の存在を仮定することができるだろうか。

時間と空間の諸表象の共変について考察し、新たな空間の構築の企図が、時間の諸表象と、特に時間についての新たな価値付与との普及に、緊密に結びつくことを排除しないことがとりわけ興味深いことであろう。この点

「frontières」が変わりつつあるとすれば、それは「西洋」諸社会が一種の「新しい境界」——同時に様々な未来予見的運動が探求し、発見している時間的境界、また、我々の集合的権力の意図せざる諸効果の抑え難い展開に比例する可能事の一種の侵蝕の結果起こり得る人間時代の終局という境界か？——に直面しているということである。

我々の社会は、諸々の人間的所産によって帰納された現世化「temporalisation」という一つの探検的科学的諸作用のもとに隠蔽されてしまった、運命の現代的な姿を再発見しないだろうか。もしそうだとすれば、しかしかの宗教的伝統は、諸々のシンボルの作用——ここでは運命の諸力からの解放が告知された——を、場合によってはどのようにして動員できるのか。諸教会と宗教的諸集団は、万一の場合、どのようにしてそうした運命的な諸力を名付け、追放しようとするのか、それらはどんなメッセージを放ち、どんな選択的実践を薦めるのか（非暴力、平和主義、「正義の戦争」などの問題を参照）。

もし、他方で、古典的な地政学的空間（同胞の住むこ

では、軍事的戦略が単なる経済的ないしは社会的論理のために忘れられるべきでないとするなら、時間と空間に關して、新たな戦略的持ち札が含意するものに、我々はまったく特殊な注意を向けることができよう。

もしも、地政学が、おもに軍事的戦略の変化に左右されて、今日、時間政治学「chronopolitique」と妥協している（政治と緊急と猶予）仮定することがまったく馬鹿げたことでないとするなら、歴史上の諸教会と、多かれ少なかれ分裂した宗教集団とが、それらの伝統のなかで、時間の特殊宗教的な形成と釣り合いを保っているものを、おそらくは非常に多様な様式にしたがって、どのように（再）解釈するのであろうか。それらの伝統が運ぶ時間の諸表象（空間の諸表象の傍らで、時にそれらと競合している）が、ある時には、より終末論的な、またある時には、より黙示録的な時間意識を養うのに、どのように寄与するのであろうか。

言い換えれば、その仮説（ヴィリリオによって「速さと政治」のなかで示唆された）は検証するに値しよう。それによると、ヨーロッパ内の空間的——民族的諸境界（ちら側と敵の幽霊が出る向こう側との分割を含んでいる）の再編成が、単に人々のそして諸文化のコミュニケーションへの豊かな熱望の結果でないとするれば、また財産と資本の広範な循環によって期待される諸利益の味気ない計算の結果でもないとするれば、そして、もし、この相互民族的、ヨーロッパの景観の再編成が、裏面として、脅威の拡散と不安の一般化という全地球的状况（国家によるテロリズムの形態の増大、全き市民における人質的地位の拡大、諸々の古典的対立の障害——政治は目下、打倒すべき内部の敵との關係で決定されるか、あるいは、奇妙な、同盟を結んだ敵に対して共謀の助けを見出している……）をもつとすれば、その時、公的権力と解されている国家の解体と準封建制への後退の危険についてはどうなのだろうか。そうした危険は、数多くの逸脱化の企てのなかで現れないだろうか。また、市民社会の一種の野蛮化の前兆とならないだろうか（国家摂理の批判の極端な拡大を参照）。

このような基本的背景のうえで、諸教会と宗教的諸集団が、どのような技量を、どのような制度的想像力を動員することができるのかを問うことは、おそらく非常識

なことではあるまい。それはどんな倫理を構築するのか。おそらくかなり最近のものである個人主義的伝統と、極めて民族横断的な諸制度の重要性と価値とを認め得る社会的倫理との間の関係は、それらの内奥においてはどのようなようになっていくのだろうか。

## 二、ヨーロッパとメタ社会的正当化の要求

ヨーロッパという観念（さらにヨーロッパの理想化）はおそらく、近代への掛け金「enjeux」に見合った諸境界の引き直しの企てから分けることはできないであろう（ヨーロッパの経済的空間を参照。ここでは、競争力の原理が、よりよい適用領域を見出すであろう。また、近代的軍備の費用と均衡する軍備の内部市場の予測と結び付いたヨーロッパ的防衛空間も参照……）。

これらの諸境界のうちに、たとえば、科学—技術的協同と間接的な「mediatique」共同生産の企図の発展にふさわしい「文化的」諸境界を加えなければならぬ（学生と研究者の移動を参照）。そのうえに、より特殊「宗教的」な諸境界を考慮すべきなのであろうか。

が応えようとしている、ないしは応え始めたと仮定して、多様な宗派的伝統が同じ切り札をもっているのだろうか。

この点から我々は、いかにして諸々のプロテスタントイズムが、民族的諸教会の設立に自らを捧げた形成過程の相対的なハンディキャップを乗り越えられるかを問うことができよう。どのようにしてカトリシズムは、教会の捷の統一性とキリスト教的民主主義の伝統とを、自らの側に役立てることができるのだろうか。

## 三、宗教的提案、社会運動およびヨーロッパの形成

第二次世界大戦の終結以降、幾つかの宗教的環境が、昨日の敵どうしの「和解」に有利に作用してきた（他の幾つかが許せないものは許せないと主張する。一方で、大量虐殺が行われたことを忘れまい）。それ以来、しばしば教会一致運動のおよび公会議的力学と釣り合いを保って、そしておそらく、国家理由の限界の「政治的」発見と歴史哲学の実証主義的遺産の批判とも釣り合いを保って、宗教

市民宗教に関する諸研究の伝統を考慮して、そして人々（政治家、ジャーナリスト、忘れてならないのはある種の宗教的行動家）が、キリスト教的ヨーロッパについて語るのに、一般的に、かつてほどにためらいを感じない限りにおいて、我々は、その状況が、「みせかけの」キリスト教のプロモーションにとつて好都合でないかを問うことができる。次のようなタイプの「欲求」の一つあるいは複数を満たすために、制度化された諸教会へと拡散する一種の提案のアピールの存在の徴候を、我々は明らかにできないだろうか。

——「野蛮な」宗教への直面（すでに言及された逸脱化の状況の宗教的等価物）

——内部の様々な根本主義に水路をあげること

——「狂信的」イスラムの脅威への備え（防火線ないしは対抗力としての）

——最後に、正当化、あるいはさらに、新たなヨーロッパ的空間の「聖域化」[「sanctuariser」]、もしくはそれへの聖なるオーラの付与。

そのような提案（現実の、あるいは架空の）に、諸教会

的權威の枠組を倫理的に再解釈する巨大な企てがみられる。

この文脈のなかで、諸教会あるいはキリスト教徒たちの、異なる民族的空間を貫く諸々の社会運動への様々な貢献に光を当てることが重要となる。平和主義とエコロジスム、人間の諸権利の主張、また、第三世界の諸国との協同と連帯の運動（ONG [「NGO」]）についても同様である。

多かれ少なかれ公式的で公共的な性格をもつこのような参画は、民族的な文脈に従って変化しつつ、再保証の反応を養うのに、また、多少とも収縮した身分証明[attestation identitaire]の力学——多かれ少なかれ民族主義的な諸主題の回復とその収斂は検討に値しよう——を建て直すのに、間接的に貢献し得たのである。

諸々の社会運動への参加、あるいは逆に、それらが示す諸価値への抵抗ないし拒絶は、おそらくは少数派的現象にとどまっている。しかし、人々がそこで諸々の「行動的少数派」——それらの高度に敵対的な諸関係が、諸々の宗教的な制度的空間のなかで、より大きな、そしてこ

これらの多様な空間が全体的なヨーロッパ的空間の再編成に直面している分だけ、より重要な騒動を引き起こす——と関わりを持ってきたということはあり得よう。それ故、これら少数派の内部へのインパクトは、それらの外部へのインパクトに劣らず、検討を要する。これに関連して、ヨーロッパの規定（掛け金と空間的境界とは分かち難く結びついている）の土台をなす闘争において、各少数派が演ずる役割を調べてみる価値はある。

我々はヨーロッパ的企図に対する認識と参画の宗教的諸様式についての類型学的彫琢を考へることができようか。たとえば、各々の宗教的伝統とそれらを構成する各少数派を、建設的悲観主義と批判的樂觀主義を経て、ヨーロッパの拒絶から全面的な加入へと至り得る一つの連続体のなかで、どのように位置づけるのか。

完全に規定されているわけではないが故に、ヨーロッパ的空間の諸限界（地理学のおよび価値論的）は、宗教的諸社会が免れることのできない競争と同盟の多様な戦略の掛け金なのである。この点で、若干の仮説ないしは問題が検討に値しよう。

そこで、有用な諸研究の余すところのない明細目録を望むまでもなく、様々な人々——諸々の教会のなかで、あるいはその域外で、ヨーロッパの制度化に、またその形成とさらにその非形成[*sa non construction*]に参加する専門家たちと闘士たち——を知ることの肝要さを示そう……。諸々の行動家たちを識別し、知ろうとすることは、彼らの、内部へのまた外部への多様な戦略を知ろうとすることもである。それは結局、多様な集団と教会（聖公会の諸会議、教会一致運動の集会など）に既に与えられているヨーロッパ的規模の構造と企図とともに、介入と参加の根拠と様式を知ろうとすることである。

宗教的領域の再編成について語ることは、単に、多様な宗教的ファミリー（諸キリスト教、ユダヤ教、イスラム教）のヨーロッパ地図の有用性を暗示するだけではない。それはまた、変化しつつあるこの領域の動態的な諸特性を調査する任務を喚起することでもある。この点では、他のタイプの力学をないがしろにしてまで、宗派の再編成とさらには同盟の可能性を過大に評価しなければならぬことを示すものは何もない。すなわち、宗教的少数派

(a) 多様な宗教的環境（宗派的、宗派横断的あるいは宗派内的な）による権威と権力の諸表象、および救済と倫理的選好の諸表象は、幾つかのタイプの参画（たとえば連邦主義的な政治的参画、あるいはヨーロッパについてのあまりに経済的な観念の批判など）に何らかの影響力を持たないのだろうか。

(b) 公式的なキリスト教運動の故に、「西洋の」キリスト教の多様な構成要素は、どのようにして、ヨーロッパ的諸境界の、東への拡大に有利に影響を与えようとするのか。

(c) それらと結びついている非政府機関の重要な発展に对应、どのようにして諸教会は、ヨーロッパ的政治（経済的、社会文化的、……）の規定における南北関係の重要性を強調するのに貢献するのだろうか。

#### 四、ヨーロッパの形成と宗教的領域の再編成

すでに行ったように、諸々の社会運動を強調することは、我々に、いささかも他の社会学的パースペクティブを放棄することを余儀なくさせるものではない。

のうちには、少数派の再編成にさらされるものがないだろうか。また、他の宗教的少数派のうちには、自らと異なる民族的伝統をもつ同様の宗派的集団に対してと同じく、彼らの多数派の対向勢力に対して類縁性を示すものがないだろうか。

ヨーロッパの形成、このことはまた、社会と宗教との関係の新しいモデルが流布することを意味し、そして、これらのモデルが、その流布に比例した正当性を獲得することによって、各々の地方的ないし民族的成果について抱かれている諸々の表象と評価とを容れさせることも意味している。この意味において、世俗社会の観念と企図とがどのような変化を被る恐れがあるかを問う価値はある（市民宗教の問題を延長することによって）。フランスの状況だけを想起するならば、我々は、フランスの当局者たちが、今後付加価値税率の軽減の程度をしかるべきところに定めるよう強制されて、将来、厳密な世俗的順応の強要可能域を修正するよう導かれないかを問うことができる。

教会—国家関係の再規定と政教分離とに有利に発言し

ようとする宗教的行動家たちがいないだろうか。とりわけ、既に手が加えられている、フランス共和国の諸々の学校における宗教教育はどうなるだろうか。

最後に、政治的行動家たちの面では、民族的なおよび民族横断的な一種の倫理的コンセンサス（バイオテクノロジー、移民の受入れ、失業の社会的取扱いといった諸問題についての）を引き出すことを目指しての諸努力——場合によっては「宗教的」専門家たちも参加する——はどうか。ヨーロッパ的空間の開放は、この観点から、宗教的事実の幾つかの再規定を、より正確に言えば、宗教の社会的機能の規定ないしは諸規定を包含していないだろうか。

（ストラスブール大学教授）

訳・杉山由紀男（すぎやま ゆきお・創価大学講師）